

## 第6回津波予測技術に関する勉強会の議事要旨について

1 開催日および場所 平成22年5月13日(木) 気象庁大会議室

2 出席者

座長 佐竹健治	東京大学地震研究所教授
阿部勝征	東京大学名誉教授
河合弘泰	(独)港湾空港技術研究所海象情報研究チームリーダー
越村俊一	東北大学准教授
谷岡勇市郎	北海道大学教授
都司嘉宣	東京大学地震研究所准教授
平田賢治	気象庁気象研究所地震火山研究部主任研究官
気象庁地震火山部	西出地震火山部長、関田管理課長、横山地震津波監視課長、尾崎津波予測モデル開発推進官、中村地震津波監視課長補佐、桑山地震津波監視課調査官 他

3 議題

- (1) チリ中部沿岸の地震による津波における津波予測について
- (2) その他

4 議事概要

事務局から平成22年2月27日チリ中部沿岸の地震による津波に対して津波警報等を発表したことについて、資料1により津波警報等発表当日における気象庁の対応を、資料2により事後の検証として、津波シミュレーション結果の分析を説明した。佐竹教授(東京大学地震研究所)、越村准教授(東北大学)、谷岡教授(北海道大学)、(独)港湾空港技術研究所からはそれぞれ今回の津波の数値計算に関する話題提供があった。出席者からの主な意見は以下のとおり。

- グリーンの法則については、反射波はないものとの仮定の下で成立する法則である。また、反射波について、波長が長い場合はその影響が無視出来ない。気象庁では、日本沿岸に到達する津波の高さの予測は計算で求めたグリッドポイントの値からグリーンの法則を用いて求めているが、今回のような津波の場合、グリーンの法則を用いることについては検討の余地があるのではないか。
- 検潮所の観測値だけでなく、現地調査の結果や、海底津波計の観測データとの比較も行ってはどうか。
- 2月27日チリ中部沿岸の地震による津波における津波シミュレーションの計算結果をみると、震源から離れた距離にある場所ほど計算と観測の到達時刻のずれが大きくなっていくことがわかる。今回紹介のあった各機関のシミュレーションでも同

様の傾向が見られ、この理由は今後の検討課題である。

- 遠地津波に関する過去事例の調査結果により、統計的に計算と観測との津波到達時刻のずれを求めることが出来れば、より観測に近い内容の津波予測が可能となると考えられる。
- 津波の到達時刻が早めに出ることに関連して、1960年のチリ地震津波の時に作成された津波伝播図とも比較してはどうか。
- 局所的に津波が高くなる場所は、経験上ある程度わかっているので、そのことの地元への周知や津波情報への反映などについて検討してはどうか。
- 最近では、津波は海底水圧計などの沖合の観測値が利用できるようになってきた。沖合の観測値は、沿岸地形の影響を受ける前の段階のデータなので、津波の予測結果を評価するために非常に有用である。